

- 園の庭をはきながら -

## パパとたあ君

たかねっち☆

「たあくーん、岡村さん来たよー」保育士が玄関から叫ぶと、たあ君は部屋からひょっこりと顔を出し、長い廊下越しに岡村さんの姿を確認するや否や、待ってましたとばかりに慌てて玄関へ駆け出します。「パパー！！」と、岡村さんに飛び付いたあ君。岡村さんも「たあ君、迎えに来たよ」とニコニコ顔で彼を抱き上げます…

今回は、ここで暮らす小学校低学年のたあ君（仮名）と、実親でもなければ施設職員でもない岡村さん（仮名）との間に芽生えたひとつの絆のお話です。

たあ君。彼は、生まれてすぐに家庭の事情によって乳児院へ預けられ、2歳になると同時に軽井沢学園へやって来ました。複雑な事情により家族との交流は児童相談所から厳しく制限されているため、彼は生まれてこのかた一度も家に帰ったことがありません。そのため、多くのこどもが帰省するお盆や正月であっても、彼は学園で過ごすしかありませんでした。物心ついた頃から施設生活しか知らず、家庭を全く知らないたあ君がこのまま大人になったら、一体どうなってしまうのだろうか。果たして、世間一般でいう“家庭”を築くことが出来るのだろうか。この先も家に帰れる見込みの無い彼のことは、私たち職員にとって大きな心配の種でした。

岡村さん。彼と私は、平成22年の夏に初めて出会いました。この頃私は応援する会を立ち上げるために様々な方とお会いしていたのですが、岡村さんもその一人でした。当時岡村さんは社会的養護の事や、軽井沢学園の存在を全く知らなかったため、私はこの世界のことを一から説明しました。すると、彼は目に涙を浮かべながら、ただひと言「知らなかった・・・」そうこぼしました。洋菓子店を経営する岡村さんは早速、自分にも何か手伝えることはないかと思案し、ここで暮らす全てのこどもたちの誕生日にバースデーケーキをプレゼントするというボランティアを始めて下さいました。また、その日余ったケーキを届けてくれたり、面白話しや抱っこおんぶで接してくれるパティシエのおじさんは、今では私たちのヒーロー的存在です。

そんな出会いから1年くらい経ったある日、いつものようにふらり立ち寄った岡村さんが言いました。「たかねっちさあ、たあ君から聞いたんだけど、たあ君って家に帰れないの？だったら、

うちに連れてくこと出来ないかなあ」どうやら4歳のたあ君は岡村さんが大好きで、彼が来るたびおんぶされながら、色々な話をしていたようです。「でも、たあ君だけ連れて帰ると他の子がどう思うかなあ」岡村さんは心配そうに付け加えました。私は、たあ君の喜ぶ姿を思い浮かべながらもはやる気持ちを抑えて岡村さんに里親制度の話を始めました。

日本には、里親と言っても幾つ種類があります。縁組里親、専門里親、養育里親など、他にも様々な形態がありますが、今回私が岡村さんに提案したのは、“ホストファミリー”という制度でした。ホストファミリーは、他の里親と違って様々な審査や手続きを経て県知事認可を得ずとも気軽に始められる、いわば里親のお試し制度です。家庭で暮らした経験の無いたあ君に、普通の暮らしを体験させてあげたいという職員の想いと、顔が似ているという理由で何故か自然と仲良しになったたあ君を家に連れて行きたいという岡村さんの想いが一致したため、私たちは早速ホストファミリーの登録を済ませました。しかし、その前に忘れてはならない大切なことがあります。それは、たあ君の気持ちです。この部分を置き去りにして大人同士の話し合いだけで話を進めてしまえば、たあ君の心を傷つけてしまいます。私は過去にそのような失敗を幾度も犯してきました。

里親との交流失敗は、里子となるこどもにとって二度目の喪失体験（傷）ともなりかねません。一度目は実親との分離によって、そして二度目は里親との別れ。一度の喪失体験だけでも相当なダメージを受けてしまうのに、それが2回。「やっぱりボクはダメなんだ」とか「やっぱ大人は信用できない」そんな思いをずっと引きずってしまうかもしれないのです。だからもう過ちは繰り返したくない。繰り返してはいけない。

たあ君は岡村さんが大好きだけれど、それは大勢のこどもと職員がいる学園内での話。彼らが二人きりで外で関わるというのは全く別のこととして考えなければなりません。「とにかく焦らずに長い目でいきましょう」私は岡村さんをお願いしつつ、自分の心に言い聞かせました。

そして、岡村さんとたあ君による“里親里子”の交流が始まりました。まずは、短時間のドライブから。そして、たあ君の様子を見ながら徐々に関わる時間を増やしていきます。少しずつゆっくと。このような交流を一年くらい続け、家にも泊まりに行けるようになったたあ君は、気付けば岡村さんを“パパ”奥さんのことを“ママ”と呼ぶようになっていました。岡村さんには、大学生と高校生の実子が3人いますので、たあ君にはお兄ちゃんと二人のお姉ちゃんも出来まし

た。岡村さん夫婦もたあ君の前では、自分たちのことをパパママと言います。

そんなパパの家に行きたくて仕方ないたあ君は、月曜日になると「明日は来るかなあ」と職員に尋ねます。岡村さんのお店は毎週火曜日が定休日のため、パパたちのお出かけは決まって火曜日なのです。仕事が忙しいため頻繁には帰れないのですが、それでもたあ君にとっては、ただ一つのボクのうち。学園とは違ってボクだけを見てくれる大人がいて、ボクが唯一主役になれる時間。実際、彼がどのように思っているのかわかりませんが、間違いなく言えることは、岡村さんの存在が彼の心の拠り所となっていることです。その証拠の一つに、たあ君は岡村さんと出かけた時に買ってもらった緑色のトレーナーをいつも着たがります。それは、どうやら岡村さんとお揃いらしくて大のお気に入りです。でも、あまりにも着過ぎるものだから洗濯し過ぎてすぐに色あせ、よれよれになってしまいました（笑）

このようにして、たあ君の家庭生活体験は順調に続いています。初めのうちは遊びに行く感覚だったかもしれませんが、今は違います。お客としてではなく、家族の一員のように温かく迎えられ、遠慮せずに甘えが出せる場所となっています。時には叱られることもあるようで、特別なことはせず普通に過ごして帰ってくるのです。そんな姿を見て私たちは思います。「いつか彼が大人になって結婚してこどもが生まれるその時、幼い頃からつぶさに見てきた岡村家の様子を思い浮かべながら温かい家庭を築いてもらいたいな」と。

・・・そういえば、交流を開始する前に岡村さんが心配していたことがありました。「たあ君だけ連れて帰ると他の子がどう思うかなあ」それは、誰もが思うことかもしれません。とかく集団生活の場では「あの子だけずるい」とか「他の子が可哀想だから」など、公平性に欠くことを嫌う風潮があります。無論、不公平はよくありません。しかし、ここで暮らす全てのこどもが、形は違えど「パパとたあ君」のような、大人との特別な関係を築くことが出来たならどうでしょうか。他の子が可哀想だからと言ってせつかくの機会を失くしてしまうのではなく、結果的に全てのこどもの心が満たされればそれで良いのです。単に機会を平等にするのではなく、結果を平等にすることが私たちの目指すところであると信じています。

先日、岡村さんと飲む機会がありました。彼は自分のスマホの待ち受け画面を私に見せながら「オレさあ、これ見る度に胸がキュンキュンするんだよね」照れながら話します。そこには、画面の中で照れ臭そうに苦笑いしているたあ君の姿がありました。まさに親ばか。苦笑いしつつも心温まる瞬間でした。